

I 青銅器祭祀のひろがり

工楽 善通

1 はじめに

銅鐸はその端麗な形の美しさと変化に富んだ文様の優美さから、弥生時代遺物のなかでもひととき目立つ存在として多くの人びとから注目されてきた。その銅鐸の研究が、考古学的に開始されてから 100 年が経とうとしている。今では佐賀県・福岡県から、静岡県・長野県を結ぶ範囲で、総数 500 個余が見つっている。その銅鐸の大半は、弥生人の集落から遠く離れた山や丘の斜面などに掘った穴の中に、1 個または複数個が意図的に埋められた状況で発見されることが多く、〈謎の銅鐸〉と呼ばれる所以である。

紀元前 500 年余前にわが国ではじまった水稲耕作を基盤とする社会は、これまでの狩猟採集にたよる縄文社会とは大きく違って、さまざまな変革をもたらしたことはよく知られたことである。この変革は、日本列島が南から北まで 20 度もの緯度の範囲にわたって、大小の島々からなりたった大地であることから、それぞれの地域で、その地形と風土と伝統によって一様なものでなかったことも当然で、実にさまざまな文化を育んできた。

最初に水稲耕作を受け入れた九州島と、四国・本州島が常に大陸および朝鮮半島と交渉をもちながら弥生文化を成熟させていき、日本の古代文化を形成してきた。この水稲農耕社会を営みはじめた弥生人にとって、稲作とほぼ同時に伝わった金属器の使用も生活に大きな変化をもたらした。はじめは工具などの利器として鉄器が導入され、続いて青銅の武器類や鏡が、下賜や交易によってもたらされた。鉄器は日常生活の中で使用されたが、後者は地域の有力者が威信財として所持し、死後も自身の墓へ持ち込んでおり、この頃すでに社会の中に階級差が生じていたことを物語っている。中期に入ると北部九州では墓の副葬品の内容から察すると、支配者層間にも数段の階級分化が認められるようになる。

一方、中・四国地方や近畿地方では、青銅器を個人墓へ副葬するという風習はなく、共有性の強い祭器として所有したのちに埋納している。その青銅器は、もはや武器ではなく、武器の形はしているが鋭利な刃はもたず、大型化した武器形青銅祭器というものに変質している。

この武器形の青銅祭器が出現するのとはほぼ時を同じくして銅鐸の製作が始まる。銅鐸は朝鮮半島に存在した小銅鐸を祖形にして、遅くとも弥生時代の中期初頭には、日本で独自に製作しはじめた。農耕祭祀の場で打ち鳴らす祭器として使用し続け、武器形青銅祭器と同様に次第に大型化して、もはや鳴らす役目より見映えのする置き物に変化しながら、集落の繁栄を支える祭器として弥生時代の終末まで使われ続けた。

2 青銅器祭祀のはじまり

弥生時代のはじまりを告げる本格的な水稲耕作が伝わる際には、その農耕が安全に豊作を迎えることができるように祈る農耕祭祀も、度重なる渡来人の往来によって伝えられたことだろうと思われる。例えばト骨による占いなどは新しい風習であるが、その祭祀の様子を物語る資料は少ない。

弥生時代の、主に西日本の遺跡から出土する遺物から類推すると、その祭りは既に金閼怨氏が紹介しているように、『三国志』魏書東夷伝の馬韓条に記された農耕祭事の情景が大変参考になると考えられる。その様子は木の竿の先に木鳥を取り付けた鳥竿をめぐらせて祭場を囲い、そこに大木を立てて鈴や鼓を懸

けその場で毎年、春秋の農事に合わせて、昼夜を問わずに飲食しながら跳びはねて踊ることによって鬼神一すなわち祖霊神を祭るというものである。その場の鈴がわが国では銅鐸となり、それを打ち鳴らすことによって神を招き、豊作をもたらす祭器として発展していったのだろうと推定できる。このような祭事の一場面を写しとったとみられる絵が、鳥取県稲吉角田遺跡出土の壺に描かれており（第2図）、日本の風土と伝統にあった農耕祭祀が定着していった。

武器形青銅器の登場は、先にも記した通り稲作の受け入れよりも遅れた弥生時代の前期末に、武器としての剣・矛・戈が導入され、その後西日本で広い範囲にわたって、武器としての威力を托して木製や石製のものが作られ、戦勝を祈って集落あげての模擬戦の場で使用されるようになった。中期に入ると青銅武器自身に呪力を見出して祭器とみなし、もはや研ぎ出して刃をつけることもなく、武器の形をしていることに意義を認めて祭器化し、材質の低下とともに次第に大型化して祭器色を強めていった。



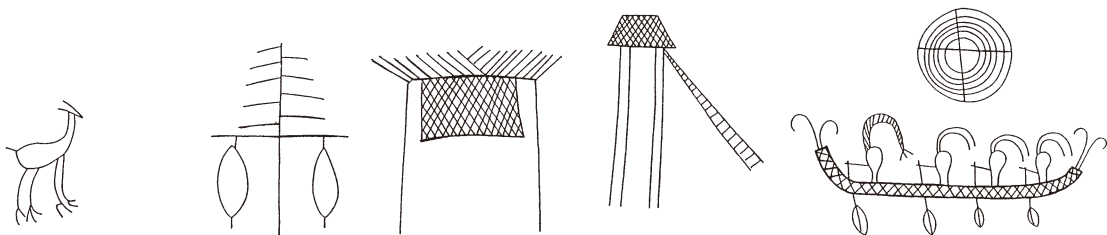
第1図 戈と楯をもった武人像
(大阪府弥生文化博物館 2011)

武器形青銅祭器は戦勝祈願のための呪器であり、自分たちの集落に迫り来る危機を追い払うための共有の祭器でもあり、境界を越えて侵入して来る悪霊を断ち切る役目を果たすものだったのだろう（第1図）。

一方銅鐸は先の馬韓の祭場に記されているように、あくまでも農耕祭祀を演出する祭器であり、祭事をおこなうことによって稲霊を呼び寄せ、秋の収穫を約束し、またその収穫を感謝して打ち鳴らす霊器であった。銅鐸のなかに辟邪文を描いたとされるものが、広島・岡山・島根・鳥取県で出土し、その鋳型が佐賀県で見つっている。そのなかには稲霊を運ぶと考えられる鳥が描き加えられているものもある。この辟邪は稲穂にとりつく悪霊を追い払い、豊作を見守る姿であり、また稲霊を運ぶ鳥を見つめて豊作を約束する顔であると解釈できるだろう。弥生社会における銅鐸に期待されたこのような使命は、たとえ辟邪文が姿を消した後の段階になっても、突線鈕式銅鐸や三遠式銅鐸が終りをつげる最後まで、果し続けていたのだろう。ただし使用者の要望に応じて銅鐸自体の形態が著しく変化したのに合わせ、それを用いる儀礼や祭式の様子も大きく変わっていったに違いない。銅鐸と武器形青銅祭器は別々の役割をもち、長い期間にわたり集落の祭りで使用されて、最終的にその役が終われば、祖霊神（大地の神）に奉げる意味で土中に埋納したのであろうと考えられる。

3 青銅器祭祀のひろがりと柳沢遺跡

柳沢遺跡で出土した銅鐸5個は、外縁付鈕1式（1・2号）、外縁付鈕2式（3・4号）、扁平鈕式古段階（5号）に該当するものであり、銅戈8本は九州型（1号）と大阪湾型a類（2～8号）であり、一つの青銅器埋納坑に伴う可能性が高いと考えられる。この埋納坑は掘穿した土層とその覆土の土器型式から判断して、弥生時代の中期末から後期前半に掘穿し、そこへ青銅器を一括埋納したと考えられている。

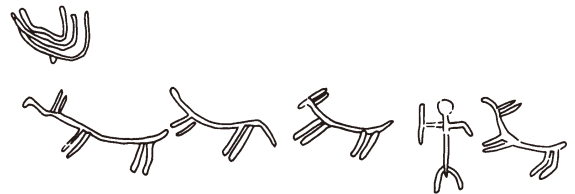


第2図 稲霊を呼ぶ祭場を描いたと考えられる壺絵 鳥取県稲吉角田遺跡出土（佐原・春成 1997）

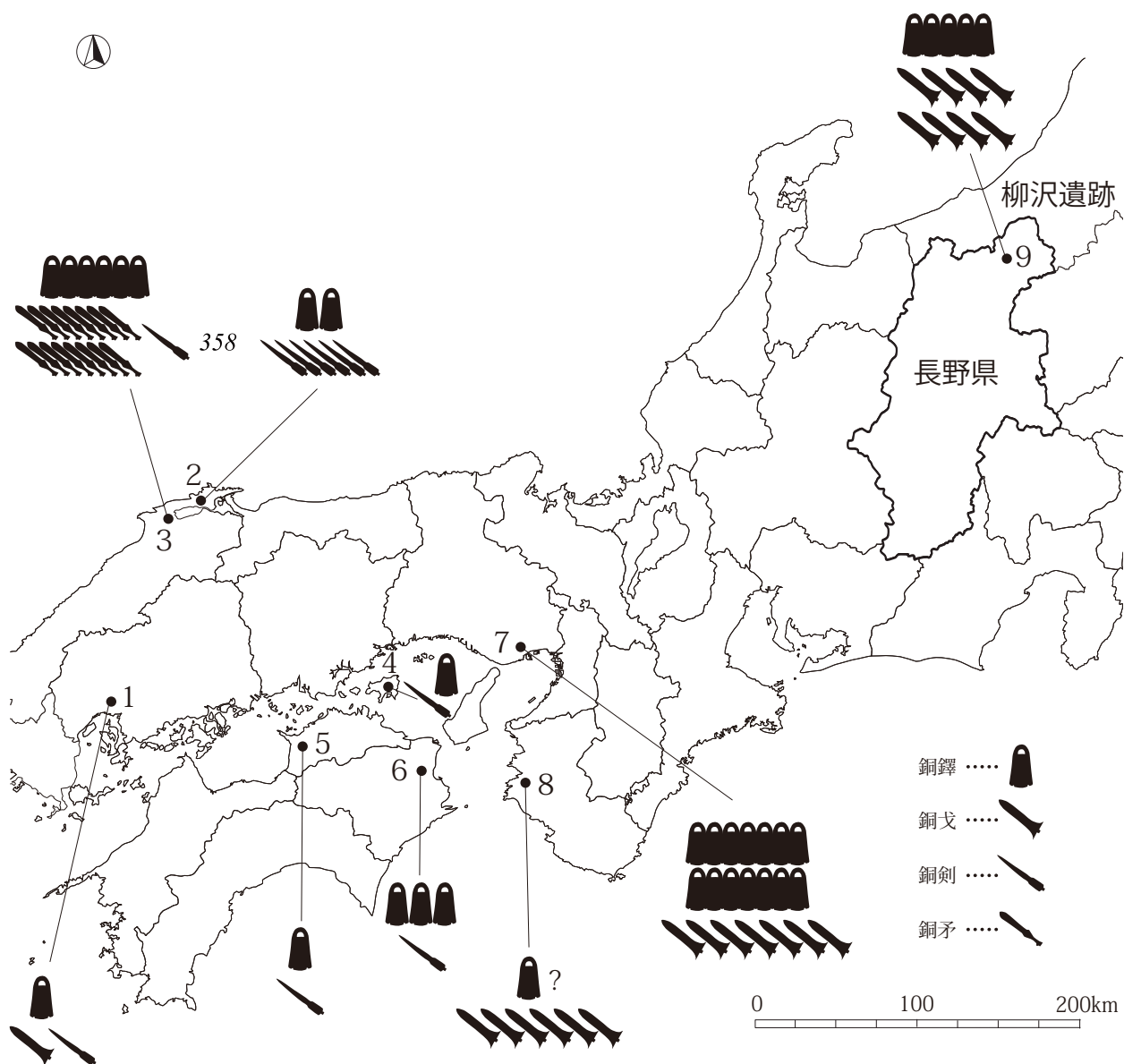
これまでのところ、銅鐸と武器形青銅祭器と一緒に埋納されて出土した遺跡は、西日本で広島・島根・香川・徳島・兵庫・和歌山県の8ヶ所が知られていたが、これに加えて、ずーと離れたこの柳沢遺跡が登場して9ヶ所となった。このうち、香川県西ノ谷遺跡と兵庫県桜ヶ丘遺跡は扁平鈕式新段階まで、徳島県源田遺跡では突線鈕1式段階までを含む新しいグループの銅鐸が古いものと一緒に入っているが、他の6ヶ所はいずれも扁平鈕式古段階よりも古い銅鐸でまとまっており共通している。広島県福田木ノ宗山遺跡出土の銅鐸は福田型と称され、その鋳型が佐賀県で出土したことから九州製であり、島根県荒神谷遺跡出土の銅鐸6個のうち1個も文様構成から九州製である。柳沢遺跡で出土した銅鐸は外縁付鈕式から扁平鈕式古段階にかけてのもので、銅戈も含めて、その製作年代は弥生時代の中期中頃（第Ⅲ様式期）と考えられる。銅鐸の製作地が近畿中心部の中河内や摂津、大和、さらには播磨地域へと広がり、石製の鋳型で銅鐸が作られ、また同范銅鐸もさかんに作られた時にあたる。そして、この近畿で生産された銅鐸が山陰・四国から飛騨・信濃・三河に至るまでの広域に流通している事実は、農耕祭祀の普及により銅鐸の需要が大きくなったことの証左であろうと思われる。このような銅鐸製作工人集団を擁した地域集団が、銅鐸の流通や祭祀の展開を主導していたという見方もある。先の西日本の8遺跡は、いずれもその立地が当時の集落と結びつく所ではないという点で共通しているといつて良いだろう。

柳沢遺跡では、青銅器埋納坑の南北約400m余にわたり、夜間瀬川および千曲川本流に沿って、弥生時代の遺跡が広がっている。埋納坑の南には水田跡、北には礫床木棺墓群と土器集中地域があり、これらは青銅器埋納坑とほぼ同時期の遺構とみられている。このように青銅祭器を埋納した祭祀土坑が、近接して同時期の稲作遺構や墓地を伴うことは極めて希有な存在である。しかしながら、これら各遺構を有機的に結びつける証拠は見つかっておらず、いまのところ遺跡の性格もまだ判然としない。この遺跡の立地は東にそびえる高社山の麓で、千曲川に合流する夜間瀬川東岸にそった低地に位置しており、決して規模の大きな集落ではなかった。

この北信濃の地は弥生時代の中期中頃以降、栗林式土器を標式とした栗林文化が確立し発展したところである。なかでも善光寺平を中心とした地域では松原遺跡や榎田遺跡・檀田遺跡などの拠点集落が存在し、出土遺物からも農業生産の着実な定着が見てとれる。松原遺跡では、集落をとり囲んで防御用の環濠がめぐらされており、栗林期が他の集落と緊張関係にあるような社会状況であったことをうかがわせている。栗林式土器の成立過程が、他地域との活発な交流による結果だと指摘されているが、なかでも北陸地方との結びつきが有力視されている。したがって栗林文化の基盤そのものは前代からの伝統を引き継いでいるものの、その要素の一部に北陸地方、さらに辿れば西日本的な要素をも取り込んでいると考えられる。その有力なひとつの証拠に、柳沢遺跡から出土した土器に描かれた鹿の絵があげられる（第3図下）。近畿地方を中心として、弥生時代の中期後半に、作物の豊饒を祈って鹿を描くことが多く、その霊獣としての鹿の描き方が、柳沢遺跡のものと石川県小松市の八日市地方遺跡で出土した壺の鹿絵ときわめてよく類似している（第3図上）。



第3図 上 線描の鹿絵部分
八日市地方遺跡出土（久田 2006 一部改）
下 線描の鹿絵 柳沢遺跡出土



銅鐸と武器形青銅祭器の共伴埋納例一覧

青銅祭器出土地	銅 鐸	計	武器形青銅祭器	計
1 広島県広島市木ノ宗山	外縁2?	1	銅 戈 銅 剣	2
2 島根県松江市志谷奥	外縁2 扁平1	2	銅 剣	6
3 島根県出雲市荒神谷	菱環1・2 外縁1 九州系	6	銅 矛 銅 剣	374
4 香川県小豆島町安田	扁平1	1	銅 剣	1
5 香川県三豊市羽方西ノ谷	扁平2	1	銅 剣	1
6 徳島県徳島市源田	扁平2 突線1	3	銅 剣	1
7 兵庫県神戸市桜ヶ丘	外縁1・2 扁平1・2	14	銅 戈	7
8 和歌山県有田市山地	外縁?	1?	銅 戈	6
9 長野県中野市柳沢	外縁1・2 扁平1	5	銅 戈	8

菱環=菱環鈕式 外縁=外縁付鈕式 扁平=扁平鈕式 突線=突線鈕式の略である

第4図 銅鐸と武器形青銅祭器の共伴埋納地分布



六甲山南麓の銅鐸と銅戈埋納地遠景（神戸市立博物館提供）



銅鐸 14 個と銅戈 7 本が供伴 神戸市桜ヶ丘遺跡
(神戸市立博物館提供)



銅鐸 2 個と銅戈 6 本が供伴 島根県志谷奥遺跡
(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター提供)



銅鐸 6 個と銅戈 16 本が供伴 島根県神庭荒神谷遺跡
(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター提供)

第 5 図 青銅器の供伴埋納

近畿地方の鹿絵の表現は、胴体を線で囲んでその中を格子目に刻むことが多いのに対して、前二者は頭から胴を一本線で描き、耳または角と足も単線で描くという特徴が共通しており、両地域に生活文化の連携があったことを思わせる事例であろう。そしてまた、新潟県上越市吹上遺跡出土の銅鐸形土製品や銅戈形土製品の存在などからも情報の交流が認められ、その緊密性がわかる。したがって北信地方への青銅製品の流入経路は、北陸地方から頸城地方を径てもたらされた可能性が高いと言える。

ただ伝播経路に関しては、弥生時代の前期以来、西日本的農耕文化の信州への伝播は、尾張・東海地方から、伊那谷経由で入って来るルートが存在していたので、今後の発掘成果の分析が必要だろうと思う。後の段階では柴宮銅鐸の存在を無視することができないからである。

北信地方では集落発展のために、西方から取り入れた新しい農耕祭祀を遂行することであっただろう。柳沢のみの小集落だけでは実行できず、笹澤浩氏が提唱している“栗林連合体”ともいべき広域共同体あげての農耕祭祀を導入したのであろう。その結果、手に入れたのが銅鐸と武器形青銅祭器である。

銅鐸の1～4号はその特徴から近畿中心部で製作されたものであり、1・2号銅鐸は多年の使用で内面突帯が著しく磨耗している。銅戈1号のみは九州で製作されたもので、他の7本は近畿地方中心部で作られたものである。

これらの青銅器は新旧に大別することができ、外縁付鈕1式の1・2号銅鐸と2～8号銅戈が古い部類に属し、外縁付鈕2式から扁平鈕式新段階の3～5号銅鐸と1号銅戈が新しい部類となる。このような年代差のある青銅器が製作地近くのどこかの集落で集められていたものが同時に一括して北信の地へもたらされたのか、或は、新旧2段階にわかれてもたらされたのか、さらにまた、九州製銅戈のみは出雲まで延びる玉作りのネットワークを通じて別途入ってきたのかなど、さまざまな仮説が成り立つのである。

1・2号銅鐸と2～8号銅戈が製作された付近の集落で共に農耕祭祀に使用され続けたのち、新しい部類の銅鐸や銅戈をさらに入手し、それらがまとまって近畿中心部から北信の地へもたらされたのだろうと思う。そして、“栗林連合体”の共有物として松原集落や柳沢集落などへ分配し、各集落の首長のもとで保管しながら祭事の時には稲倉から取り出して使用を重ねていたのだろう。明治時代以前に長野県大町市小谷で出土したと伝えられている銅戈は、精査の結果柳沢銅戈の2～8号と同じ大阪湾型a類と認定されているので、この銅戈も柳沢遺跡出土の青銅祭器とともに一括して手に入れた可能性はあるだろう。今後さらに出土例が増えるかも知れない。そうすると、何ヶ所の集落で分散保有していたことになるのだろうか。北信の地へもたらされる際には、農耕祭祀にともなうさまざまな仕来りや、青銅祭器の取り扱いに関しても、こと細かに伝授されたのだろう。岡山県南方済生会遺跡出土の線刻剣形木製品や、石川県八日市地方遺跡出土の線刻板のあるものはそうした農事暦を記した木札であった可能性もあり、それを祭器とともに手渡すことで引き継がれていったのであろう。

弥生時代の中期末頃から後期前半にかけて、善光寺平で栄えていた拠点的な大集落は姿を消しはじめ“栗林連合体”も解体の方向へ向うことになる。

『後漢書』によると紀元後1世紀頃の記事として「倭国大いに乱れる」という記述がある。この動乱の範囲が信州の地にまでを含んでいることは充分に考え得るが、集落解体の要因が何であったかは不明である。この世情に合わせ“栗林連合体”の盟主が分配していた青銅祭器をとりまとめ、聖なる高社山の麓にある柳沢の地に埋納したのである。その時期は紀元後1世紀前半頃の出来事とみられる。

4 まとめ

弥生時代の生活を支えた生業のうち、稲作農耕はもっとも重要な位置を占めていたと言える。弥生人はその農耕を一層発展させるために、土地の開墾や田畑の維持、そして用水の確保に多大な労力を払ってきた。しかし、どうしても人間の力だけでは解決できない天候不順や自然災害、地域間の争いに直面した時には、天空の神や地の神、水の神に祈ることで、神の加護を得ようとした。その神を身近に呼び寄せる霊器として、銅鐸や青銅の武器を祭器に仕立てて、それを競って手に入れた各地の首長層たちは、集落の安全と豊作を祈って祭事を挙行了した。

北信の地でも、弥生時代の中期中頃には、善光寺平一帯を掌握していた“栗林連合体”の盟主が、近畿地方の中心部から途中の仲介集団を経由して、銅鐸と戈形青銅祭器を一括して手に入れ、傘下の拠点集落の首長に分配して、首長が司祭者となり各集落で青銅器祭事を取りおこなったのであろう。この地での祭りは数10年は続いたのであろう。

後期初頭頃になって、農耕発展の陰に、新集落の出現や集落間の軋轢などで矛盾が生じ、その社会動乱のあおりで“栗林連合体”も衰退の一途をたどるようになった。ある時、分散していた青銅祭器は集められて、高社山麓の柳沢遺跡に埋納された。

このような扁平鈕式古段階までの銅鐸や青銅祭器を単体あるいは集合して埋納する行為は、青銅祭器使用範囲のあらゆる地域の集落で、ほぼ同時に実施されている。その社会的背景に『後漢書』に記された「倭国大いに乱れる」と、どう係わるのか、大きな課題である。

参考・引用文献

- 岩永省三 1997 『金属器登場』歴史発掘7 講談社
 大阪府立弥生文化博物館編 1992 『弥生の神々』
 大阪府立弥生文化博物館編 2000 『神々の源流』
 大阪府立弥生文化博物館編 2007 『稲作とともに伝わった武器』
 大阪府立弥生文化博物館編 2011 『豊饒をもたらす響 銅鐸』
 金関 恕 2004 『弥生の習俗と宗教』学生社
 国立歴史民俗博物館編 1997 歴博フォーラム『銅鐸の絵を読み解く』小学館
 佐原 真 1974 「銅鐸の祭り」『古代史発掘』5 大陸文化と青銅器 講談社
 佐原 真 1996 『祭りのカネ銅鐸』歴史発掘8 講談社
 佐原 真 2002 『銅鐸の考古学』東京大学出版会
 佐原 真・春成秀爾 1997 『歴史発掘⑤ 原始絵画』講談社
 長野県埋蔵文化財センター編 2008 『速報写真グラフ 北信濃 柳沢遺跡の銅戈・銅鐸』信濃毎日新聞社
 長野県立歴史館編 2009 『山を越え川に沿う ―信州弥生文化の確立―』長野県立歴史館
 難波洋三 2004 「銅鐸と銅鐸祭祀の変遷」『國學院大學 21COE 考古学・神道 ミニ・シンポジウム予稿集 日本列島における青銅器祭祀』國學院大學
 難波洋三 2009 「柳沢遺跡出土の銅鐸と銅戈」『山を越え川に沿う ―信州弥生文化の確立―』長野県立歴史館
 難波洋三 2011 「弥生の祭器 ―銅鐸の謎にせまる―」『平出博物館紀要』28 塩尻市立平出博物館
 春成秀爾 1987 「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』12 国立歴史民俗博物館
 久田正弘 2006 「北陸地方の絵画資料」『原始絵画の研究』六一書房
 柳田康雄 2010 「弥生王権の東漸」『日本基層文化論叢』雄山閣
 吉田 広 2004 「武器形青銅器の祭祀」『季刊考古学』86 弥生時代の祭り 雄山閣